

## 和光鶴川小学校第2回公開研究会「基調報告」

### 少年少女期の教育

#### 1、はじめに

和光鶴川小学校は開校3年目を迎え、2階のフロアーの教室に、1年生から3年生までの子どもたち、合計228名が学ぶ学校になった。3年生から理科、工作技術科の専科の教科が始まったので特別教室もすべて活用して授業が進められている。念願の体育館と屋上プール建築が7月に着工され、2月末実完成引き渡しの予定で順調に進められている。

昨年の第1回和光鶴川小学校公開研は東京地方の記録的な大雪の中でおこなわれた。朝から降り始めた雪は始業時刻になるにつれて激しくなり、交通麻痺の情報はいるようになった。150名を越える予約があったにも関わらず、始業時刻には参加者はまばらであった。緊張して第1回公開研を準備してきた私たちは天を恨んだ。ところが、雪の中を学校に向かう参加者が途絶えなかった。40分以上もかけて雪の中を歩いてきてくれた人もいた。いつのまにか250名を越える参加者で学校の中は熱くなっていた。世田谷の和光小学校の仲間が子どもたちの非常時の集団下校体制をつくって引率してくれたおかげで、1日の研究会日程を無事終えることができた。私たちは、全国の、そして身近な仲間の力に支えられた感激を決して忘れない。

文部省は10月6日の協力会議による1995年度からの学校隔週五日制の方向をうけ、その後、正式に確定した。現在、全国の学校でそれに伴う教育課程の作成作業が進められていることと思う。文部省が全国の研究協力校の実績をまとめた資料によると、現行の指導要領の範囲で実施できるし、父母からの支持も多いということである。

しかし、超過密な「新指導要領」と、それと深部では屈折（和光小学校公開研究会基調報告）している「新学力観」に立つ教育実践を強要されている現場ではその言葉は空しい。教師たちからは次のような苦渋に満ちた声がでている。（『子どもと創る学びの世界』和光小学校・和光鶴川小学校編、星林社）

子どもは、学びきれない内容でいっそう学校嫌いになってきた。

教師は、教えきれない内容でいっそうあきらめとストレスが増えた。

親は、学校不信が募り、塾産業に足を向けるようになっている。

研究指定校の一員だった友人が、「はじめから『現行の指導要領でも可能』という結論ありきの研究だった」と語っていたが、その言葉のほうが信憑性がある。

7月29日に文部省がまとめた学習塾調査の結果は現代の学校教育の矛盾を示している。それによると、平均で中学生の6割、小学生の2割強（高学年では約5割弱）が塾通いし

ている実態が浮かび上がった。この事態に対して、親の6割、塾経営者の4割もの方が異常と答えている。子どもの生活や発達面から見ると正常な範囲を超えているとみているのである。それぞれが異常を感じながらも、いっそう過熱しているところに現代教育の異常さがある。しかし、塾の過熱は様々な問題を生む直接の原因でなく、むしろ学校教育の病弊の結果と見ることができる。

学校五日制もまた、1989年指導要領の路線とは別なところからでてきている。働き過ぎで儲け過ぎ、という国際的な経済摩擦をそらす政策の一環として急遽導入されたという。それだけに、学習内容の再編成も子どもの地域生活の充実のための基盤整備もないままに「五日制」だけが進行しているというのが実状である。

私たちは学校五日制の方向には賛成である。子どもの生活と学習を真に充実する方向で様々な改革がなされなければならないと考える。

学校五日制を検討することは、学校と社会の関係を見直すことである。この世に生を受けた子どもの成長発達に家庭と地域と学校がどのような役割を果たすかを検討することである。

学校にあっては、子どもの人間的な発達をうながす学習と生活の場としての諸施策を真剣に編成し直すことである。私たちの学校でたびたび指導助言を求めている川合章氏（埼玉大学名誉教授）は「現行の教育内容の量を3分の2くらいに削り、真に学習主体を育てる教育課程を編成しなければならない。」と

語っている。現代必要な課題は、まさに、新学習指導要領の根本的見直しと、下からの教育課程自主編成運動を旺盛に進めることではないだろうか。私たちは、公開研究会をこうした自主運動の一つに位置づけ、全国の仲間と連帯して研究を深めていきたいと考えている。

昨年の公開研では、私たちは開校2年目までの教育実践を元に、「どうする 幼児期から低学年期の教育」という研究テーマを掲げ、みなさんと討議を深めた。

今年度は、基本的に、昨年の方向での学校づくりを進めながら、新3年生が生まれた段階で、とりわけ2年生の後半から3年生の教育課題と実践を検討したいと考えた。したがってテーマを「幼児期から少年少女期の教育」としたのである。

## 2、いまをいきる子どもたち

### (1)子育て不安・生活不安

昨年の基調報告で紹介した、不況時代にあっても不況知らずの典型だった渋谷の子ども

向け百貨店キッズファーム・パオが11月いっぱいまで閉店したという。「一児豪華主義」の子育てもカネかけずの世相に入ったようである。少なく生んで豪華に育てるという基調は変わっていないが、「少ないお金でどう、おしゃれをするか」という点で母親たちが賢くなったのだという説もある。

こうした傾向は塾産業にもあるようだ。「塾は入会金を廃止した」という。少子化時代と不況が重なった現象とでもいえるのだろうか。ところで、私たち私学にとっても、これはひと事ではない。一時のブームは既に陰りを見せ始めている。

学校教師にとってこのことはどのような意味を持つのだろうか。いっそう「子育て不安」と「生活不安」を募らせる親が増えるのではないだろうか。そこへの対応が私たちに求められる。

「子育て不安」に追い込まれている親をどう受けとめて対応したらよいのであろうか。

昨今はナイーブでデリケートな子どもが大変増えてきているように感じられる。B君は一見出しゃばりで乱暴なそぶりをする子である。振る舞い方が幼稚で不器用なところがある。そういう子は教室で、女の子の攻撃の対象になりやすい。家に帰ると「この世の中で女ほどいやなものはない」と母親に告げる。母親は、子どもの言葉を真に受けて教師に相談する。こうしたとき、母親の不安や疑問を、まず、丸ごと受けとめてあげないとすれ違いが生ずることが多い。教師と親のこうしたすれ違いが、子どもたちの状況をますます悪くする場合も多い。B君の行動は、彼の精神的不安定さと裏腹の表現であり、本音ではきちんと受けとめてもらいたいと願っていた。教師と親が子どもの見方をすり合わせる中で両者のしこりは消えていった。

教師には、親と子育ての喜び、悲しみ、悩みを共感できる能力が必要である。少なくとも、親の声をよく聞いて理解する努力が必要である。

また、不況の影響をまろにかぶった家庭の話も身近な話題となってきた。経済的にも精神的にも不安定な状況が子どもの学校生活に影響を与えていることも多い。

## (2) ゆっくり聞いてほしい

入学当初の子どもたちは行動でも認識でも自己中心性が顕著である。その子どもたちも学校生活を送る中で、周りの自然や人間への理解を広げてくる。認識的には未分化から分化の時代といわれる。この過程は、人間としての分別が付いていく過程といえるのではないだろうか。ところで、昨今、この過程が非常に不十分な子どもが増加しているように感じられる。

1年生のD君は、今年注目しているこの一人である。私は生き物名人で彼と関わっている。最初の「名人になろう」の日のことである。生き物名人の集合場所は私の部屋（校長

室)であった。私が部屋にはいると、すでに1年生14名が来ていて、そのうちの5～6名が私の机のところで昆虫標本を見ていた。その中心にいて、私の椅子に座って仕切っていたのがD君であった。

その日は、裏山の雑木林に入った。朽ちたこならの木を割ってみると中にクワガタの幼虫が入っていた。

「ちょうだい、ちょうだい」と真っ先に駆けてきて独り占めしたのがD君であった。彼に大人の片腕ほどもある朽ち木を渡して、ここにおいておいて授業時間が終わったら教室に持って帰ろうねと話したが、手にしたものは放したくないらしく持って歩こうとした。と、そのとき、ポロンとクワガタの幼虫が地面に落ちた。しかも、彼自身が踏んでしまった。しかし、彼は残念そうな表情ひとつせず、あたらしい生き物探しに向かった。物に丁寧に関われない子だなという印象が強かった。

秋になってバツヤやコオロギを捕りに出かけた。彼は生き物が大好きである。だから真っ先になって進む。しかし、不器用さもあって、それほど上手につかむことができない。友だちがバツヤを捕まえると「ちょうだい、ちょうだい」、かまきりを捕まえた子がいると「ちょうだい、ちょうだい」と、ほしい物を自分の手にせずにはおれない。

タニシを捕りにいったときもそうだ。まず、教師の捕った物をもらおうとする。幅が50cmくらいの小川のところまで約30分の道のりである。彼は、道ばたの竹の棒を拾い振り回しながら歩く。帰りにはそれが、工事用の紅白の支柱に変わっていた。「それは学校には持って帰れないよ」というと、「せっかく竹と変えて持ってきたのに」と残念がっていた。

生き物は彼の夢中になる分野である。だから生き物名人の時間は生き物に関わる方向で彼の無節操さが発揮される。課題と関心が同一方向であるから問題は起こらない。ところが、そうでない時は、かき乱す役割をすることが多い。いたずらもするし、友だちへの暴力もある。生活全般に自己管理ができない。

最近、このような子どもが男の子にも女の子にも多いのが特徴である。学級や学校に一人や二人はいてもびっくりしないほどではないだろうか。こうした子をどう見たらよいのだろうか。

2年生のAちゃんは情緒が不安定で幼稚園時代から話題の子であった。うどんづくりを参観したが、活動中に何回も「Aちゃん!」[Aちゃん!]と注意されていた。うどんをこねる作業をほとんどせずに教師や援助に来てくれるおかあさんのお知りに小麦粉を付けて遊んでいた。包丁で切るときになると真っ先にやりたがっていた。ヒヤヒヤした思いの参観であった。

小学校に入っても続いた。Aちゃんは大変プライドが高いので、自分お思い通りにこと

が運ばなかったときやそれがみんなの中ではっきりしたときにはパニックに近い行動を起こした。

担任の教師は、ある時は彼の思い通りにさせていた。一日中自分のカメラを預け、さわらせた日も何日があった。しかし、学級の中で彼を正面から問題にすることもあった。ねばり強い働きかけの中で、最近のAちゃんはおだやかな表情を見せることが多くなってきた。低学年時代は「わがままバンザイ」が許されるときがあってもいいようである。

幼児期から自分の思いや表現をゆったりと受けとめらる経験の不足が、分別の時代へと向かえない原因になっているのではないか、そしてこの状況は、青年期まで引きずられているという説がある。必要なことは、自己中心性にたっぷり浸らせることと、他者理解を育てることを統一して指導することではないだろうか。こうした大人と子どもの厚みのある関わりを通して安定した生活を作り出していきたい。

### (3) 子どもの居場所のある学校とは

C君は3年生になってしばらくの間学校が来にくい場所になっていた。学級編成替えがあり、友だちも学級の雰囲気も変わったことが一番の原因のように思える。保健室訪問がしばらく続いた。彼が、そういう状態から抜け出したのは、「カイコ」の取り組みが本格化してからであったようにみえた。

C君もD君のように虫が大好きだ。しかし、内面は全く違う。無口で教室にいても目立たない子どもである。ひ弱で、友だちも少なく、いつも影のように行動している子どもである。彼は入学の時、文字の力を全く持っていなかった。自分の名前も書けるようにはなっていなかった。「学校で教えますから、ひらがなを練習してくる必要はありません。」と学校は親に伝えているが、昨今はC君のような子は少ない。しかし、彼は字を書けないだけで、生活経験は豊かに蓄えていた。

彼が、精気を感じさせるようになったのは学級が虫図鑑づくりに取り組んだことにあった。学校裏の雑木林に1時間はいると、てんとう虫、かなへび、かまきり、ななふしなどよく捕ることができる。始め、雑木林に入っても、「お化けがでそう」などと後込みしていた子どもたちも、虫に夢中になるうちに雑木林をかけがえのない生活の場とするようになった。教室に50種類を超える小さな生き物が持ち込まれた。虫の取り方、名前、飼い方に一番くわしいのはC君であった。彼は、虫博士といわれるようになり、クラスのみならず頼りにされる存在となった。

C君は1年生2年生と生き物名人を続けた。「名人になろう」の日は多少の熱があっても学校に登校した。「名人の日」が生き甲斐となっていたのである。家でもいろんな生き物を育てていた。2年生の時には、野生の蚕である『クワコ』を成虫(ガ)になるまで育て、

その観察記録を長期にわたってまとめてきた。

そんなC君だったので、カイコの取り組みが始まると、さっそくクワコを学校に持ってきて飼育し始めたのである。それが、元気の元となったのである。

「学校に子どもの居場所を」ということがよくいわれる。それは、子どもが認められる場所を多様に用意することという意味で、主に生活指導の研究会等で語られることが多かったように思う。私は、それを否定するのではないが、多様な場面の概念を広げることが大切だと考える。子どもの興味や関心、こだわりに打ち込める「生活(学習をふくむ)」が学校の中にあることが大切だと思う。C君にとっては生き物が生き甲斐だったが、他の子どもには他の生き甲斐があるであろう。そういう意味での「居場所のある学校」が、今、求められているのだと思う。

#### (4)子どもの権利を生かした教育を

フランスのルモンド紙は「日本のいじめ自殺」について次のことを指摘している。

超競争的な教育システム

極端な順応主義

孤独な子どもに対するグループによる組織的攻撃(ソーシャルブルータリティー)

物質享楽主義が生み出す歪んだ人間関係

そして、日本では子どもが、「母親からは大事にされもとなからの暴力も少なく、街路でも安全でつまや苦・未成年者の犯罪も比較的わずか」など「子どもの樂園」のようにいわれているが、そうでないことが事件を通じてわかると述べている。

私は、ルモンド紙が「いじめ自殺」事件を日本の教育全般の既決ととらえているところに賛同する。今回のいじめ自殺事件では、まさに日本の学校をどう変えなければならないかが問われているのである。「超競争教育の教育システム」を排し、画一的で適応的な良い子像に順応する「極端な順応主義」から脱却し、異質を排除する「組織的暴力性」を転換する道の追求は、学校教育の大きな課題である。

### 3、低学年教育から中学年教育を展望する

私たちは、開校以来、子どもの権利条約を生かし、子どもの発達に即した下からの教育課程を視点に学校づくりを進めてきた。

昨年の基調報告では以下のことを提言した。

低学年で育てたい3つの力

原体験重視の教育で

探り調べわかる力

交わる力

つくりかえる力

低学年教育への提言

子どもを発達の主主体ととらえる

今を生きる子どもたちのための下から つくる教育課程

総合学習を教育課程の一領域に

教科教育は教科の系統と子どものわか り方を統一して

子どもたちの発達の質的变化をとらえ た教育で中高学年の展望をつくる

私たちは今年の教育実践の基本をここにおいて学校づくりを進めている。とりわけ今年の課題は、新3年生が誕生する年でもあったので、「低学年教育から中学年教育」の発達期の教育課題と実践を研究の焦点に据えてきている。

私たちは原体験の重視で生活や科学の基礎を育てる教育が低学年教育ではとりわけ大事にされなければならないと考えている。そして、「子どもの生活から出発」し、「子どもとともに学ぶ」ことは学校教育のすべての分野の指導を貫く軸になると考えている。

原体験という言葉で私たちが念頭に置いていることは、「ままごとのような疑似体験や活動主義的な体験」でなく「確かな事実認識につながったり、人間として生きて行く上での糧となる体験」である。和光ではこうした原則を生活勉強でも3年生以上の総合学習でも、また可能な限り教科教育でも追求しようとしている。

3年間を経て学校の個性ともいえるものができつつある。和光鶴川小学校の教育の特徴を3つにまとめてみた。そのうえに立って4つ目に低学年教育から中学年教育への課題を展望してみたい。

#### (1)子どもの生活から出発する教育

一つ目は、子どもの生活から学習を始めること、そして子どもとともに学ぶことを大事にしていることである。小菅学級での子どもの1年間は、子どもの生活と認識の広がりを実にわかりやすく示している。(94年夏期合宿レポート『せんせいみつけたよ...発見・驚き・探求・交流から広がる子どもの世界』)

「入学したての子どもたちははりきっている。1年生は自然や社会の変化に驚きをもって見ていくにちがいない。実際、言いたい伝えたいことだらけの1年生であった。」

小菅学級では、毎朝の発表が、「見つけた発表」から「つくった・できた発表」そして「そのほか発表」へと広がっていった。

ダンゴムシや花、実などを「つうがくろでみつけた...」「雑木林でみつけた」「家のまわりで見つけた」という見つけた発表。「秋の紅葉や木ノ実を使ってギョウザをつくったよ。」「じゅずだまとからすうりてネックレスをつくったよ。」というつくったできた発表。「占い」「びびったこと」「いぬのけんか」「きんじょのおそうしき」などのそのほか発表。発表のテーマは、子どもたちの学校での学習や生活、そして地域での生活のあり方と関わって広がり深まることわかる。生活の広がりが発表を豊かにし、また逆に発表が生活を豊かにするという両面がある。文字が自由に扱えるようになるにつれて、「見つけたカード」に記入しての発表へと発展していった。

こうした子どもたちの生活と学習を日常的に結ぶことを土台に、取り立てた学習をみんなで行き組む。年間を通してみると、季節の変化や子どもたちの関心と教師のプログラムがうまく絡まって、全体としては学習主体としての子どもとつくる学習となっている。

4月 ...なぞのたねシリーズ

春から夏...ぞうきばやしたんけん地図

ぞうきばやしであそぶ

5月から6月...キュウリを育て販売

秋...じゅずだまお楽しみ作戦

秋...干し柿づくり

春から秋...そめものやさん

秋から...動物とのふれあい

(うずら、そしてチャボ)

秋から...麦を植える、冬・麦ふみ

冬...球根を育てる

冬...陶玉づくり

冬...春はどこに

子どもたちの身近な生活の興味関心から出発しながら学習課題を設定した生活勉強の中で、自然や人間へ積極的に働きかけ、さらにその世界を感性豊かに受けとめる生活と学習の主体が育っている。

ばった

あやべゆうき

ひょんひょんひょん

みんなそろってきいてごらん

くさのなかからきこえるよ  
たのしくたのしくきこえるんだね  
ばったのあしおと

のびるはのびる

田中けいご

どんどのびろ  
もっとのびろ  
てんまでのびろ  
のびたらぼくらがくってやる

小とりさん

まき

木の上で まちをみながらないていた  
ちゅうちゅうちゅう  
まちにひびくとおもってた

新学力観に立った教育への現場からの疑問、批判が強まる中で文部省の揺れの大きさが目立つ。今年出版された「新学力観に立つ 教科の指導」というシリーズを見ても、「教師の指導は当然ある」とか「基礎基本の学力は必要ないと言ったことはない」と言い回しを変化させている。

文部省教科調査官の角屋重樹氏は、8月10日の神戸市立港島小学校で行われた、10月に開かれる予定の全国小学校理科教育研究発表会に向けた1日研修の指導助言で次のように語った。

「子ども中心の新しい学力を言って来たが、放任が教育だと言うひどい現象がでている。子どもたちの好きなようにさせて、成長発達ができるのかというのがでてきた。とくに1から2年生の生活科にでてきている。子ども中心と言うが、価値ある体験を示さなければならない。本当の意味で支援を。」

角屋氏は、5月の研修ではサラダパーティーやお祭りは形骸化したとして新しいものを創るように言われたという。そして今回、低学年理科や社会科の蓄積を元に、子どもの成長や発達を見通した価値ある体験を提唱したのである。これは生活科が始まる前から私たちが唱えていたことである。体験や活動自体が目標であるとした文部省生活科が破綻した

ことを自ら語ることになったと言ってもいいであろう。

私たちとしては、子どもを能動的な学習主体に育てる生活勉強を軸にした低学年教育をいっそう充実させていきたいと考えている。

## (2)豊かな自然を生かした学校

2番目の特徴は、地域や学校の立地条件を十分に生かした学校づくりである。鶴川は、まだ豊かな自然が残されている地域である。

子どもたちが持ち込んだ生き物、教師が持ち込んだ生き物、学級で決めて飼育している生き物など、子どもたちは学校でたくさんの生き物に囲まれて生活している。

職員玄関の犬走りには20年前の多摩川のメダカが泳いでいる。春には繁殖し数を増している。玉川学園に住む方が提供して下さったものだ。その横には、縄文時代の遺跡から発見された種を現代によみがえらせたとして有名な「オオバ蓮」が水槽の中にある。これも、自然保護関係者から頂いたものだ。

玄関の大きな水槽には、たなご、こい、ふな、ほとけのどじょう、ふつうのどじょう、くちぼそ、あぶらはや、たにしがいる。たなごは開校の時、高校の理科の先生から水槽ごといただいたものだ。どじょうやたにしは生き物名人の子どもたちが捕ってきた。

その隣には、海水魚ようの水槽がある。ハゼ、カニ、ひとでが生き続けている。家族で磯遊びに行って捕ってきたものが生き続けている。またその隣に、水中のギャング「タガメ」がいたが、一冬越したところで死んでしまった。タガメを買うきっかけは、生き物に夢中の一人の男の子が、タガメを繁殖させることに成功させたという新聞記事を学校にもってきて紹介したことにあった。

2階に上ると、まずたにしやメダカのはいったつuitateにぶつかる。教室では熱帯魚が飼育されている。春、理科室前のスペースはにぎやかだった。3年生の理科の授業の一環として近くの黒川地区のキャベツ畑で採集させてもらった青虫がうごめき、壁には羽化の記録が貼られている。興味ある子どもたちが休み時間になるとスケッチに来て書いたものだ。チョウへの関心が高まると、アゲハチョウの幼虫もとどいてにぎやかだった。また、その横には山椒魚の稚魚が飼育されていた。水中の小動物の飼育をよくやっているという情報を聞きつけた知り合いからおくれたものだ。子どもたちの観察記録にはチョウだけでなく山椒魚も加わった。1年生の教室前のオープンスペースには春の磯遠足で捕まえてきた小魚が生き続けている。

校舎裏の飼育小屋のスペースには、うさぎ、うずら、チャボ、山羊、そして牛もいる。一つ一つの飼育動物に学級集団の物語が含まれている。

一つ一つ生き物に、生き物と子どもたち、生き物を通した子どもと子どもの物語がある。生き物とのつきあいは生き物の生体や生きるリズムに合わせない限り長続きしない。とりわけ家畜類は資料の確保、食事と清掃、糞尿の処理などの飼育当番、飼育記録など、生かし続けるための苦勞を伴う。しかし、ヤギや牛などは飼い主を理解して感情を通わせてくる。こうした交わりを通して、子どもたちは周りの環境との共生を無意識のうちに学んでいる。生き物に囲まれた生活自体が子どもに何らかの良い意味での影響を与えているように感ずる。

和光鶴川小学校には雑木林がある。私たちは雑木林を遊び場や忍者道場など生活の場、虫取りの場、葉っぱ集めやどんぐり集めの場として教育活動に有効に生かしている。雑木林を歩くと、たくさんの自然の恵みが手にはいる。春の新入生歓迎会は、2年生のヨモギ摘みで始まる。校庭や雑木林を使った遊びの会を開き、摘んだヨモギでヨモギ餅をついてお祝いする。セリ、ノビルなど山菜が発表される。教室では山菜てんぷらをつくって「食」に挑戦する。もちろん、教師も山菜パーティーで新学期の疲れをいやす。雑木林の教育については昨年の基調報告にくわしく報告されている。現在プロジェクトチームを作って、いっそう有効に使うための雑木林活用計画を作成中である。

梅が実る時期になると梅ジュースや梅干しづくりが始まる。キュウリの苗を一人1本植えて収穫するのも楽しい。校庭に無人販売所を設けて親や教師向けに販売し始めると、子どもたちのキュウリを見る目も厳しくなる。

キュウリの形や色、育ち具合などを見る目が育っていく。

校庭の花壇には麦畑ができる。粉をとってパンをつく秋祭りで商品として売り出す。6月になると穂の実りをめざとく見つけた鳥たちが餌をついばみにくる。防鳥ネットを張った日の午後、早速キジバトが網に引っかかった。

今年は2学期の始業式の日に通学路でイガが開いて落ちた栗を拾った。しばらくの間、子どもたちは拾った栗を職員室に届けて教室に向かう。秋の盛りにはどんぐりをどっさり集めることができる。椎の実を食べたり、どんぐり団子にしたりする。

晩秋から初冬の風物詩は1年生の教室のベランダにつるされる「干し柿」であろう。鶴川地区は柿生地区の隣であるだけに昔から柿を栽培して生計を立てていたところである。しかし、この地域の柿はゼンジマルといって甘柿であるため、干し柿には向かない。教師はいろんなつてを頼って渋柿を求める。1年生は学校の近くを散歩しながら近所の庭にある柿を枝から直接採らせてもらう。昨今の子どもは食べる物を直接採って口にする体験は少ない。

「1年生でも鋭い質問をするもんだね」と柿もぎをさせてくれた近所のおじさんがびっく

りしていた。

「柿の中にはどうして虫がいないの?」「柿の色は一つ一つどうして違うの?」「柿の枝はどうして折れやすいの?」・・・と続いたという。

こうした体験は、自然を自分の体に取り込んでいく上で大きな影響を与えているのではないだろうか。

### (3)豊かな文化のある学校

#### 手作り文化

学校生活には様々な手作り文化の活動がある。子どもたちが虜になる文化は毎年引き継がれるようになる。そのひとつが「染め」である。子どもたちは持ってきた木綿のハンカチを、できあがった時の模様を予想していろいろな折り方をする。子どもは最初真っ白な木綿のハンカチがきれいに色づくことを喜ぶ。2回目になると、折り方と結果を結びつけて考えるようになる。

「きょうわたしは おりそぞをみてたら、きよちゃんのやつが まんなかのところがいろじろだったよ。わたしのつくりかたがわかったよ。まずさいしょに さんかくにおって、いたぞめすればできるよ。でもまだわからないよ。おはなのかっこうだったからびっくりしたよ。」

染めの仕組みがわかってくるほど、子どもたちは夢中になる。「今度はTシャツや靴下を染めたい」と意欲満面になる。「子どもたちが(染めの世界に)染められています」と担任は通信で報告している。

そのほか、1年生では祭りが近づくと財布づくり(縫う)やお店の商品づくりなどに取り組む。2年生は、パンづくり、誕生絵本づくり、に加えて個々の驚き、発見、こだわりを「じょうほう新聞」(個人新聞)に表して報告する。たとえば「スズメバチ」などの情報が何枚も集まると情報本として合本する。

また、子どもの俳句がたまると「個人句集」にして印刷してあげる。子どもたちのやる気がいっそう高まる。

#### 名人、達人文化

子どもたちの興味関心によって選択できる学習を1年生の秋から始めた。「名人になろう」という時間で、子どもはクラスに関係なく自分の好みの活動に参加する。その時間が子どもたちにとって好評だったので3年生でも「達人になろう」という時間を一月に2時間取るようにした。「生き物」、「栽培」、「料理」、「工作」、「探検」、「太鼓」と分かれて学習する。

「名人の時間が楽しみだよ。家でもときどき料理つくっているよ。」と、年賀状をくれる子がいる。子どもなりの文化形成の萌芽といったら言い過ぎであろうか。

戦後、和光は日本生活教育連盟の本部実験学校として始まり、生活教育の研究実践を大切な任務とする学校として生活教育に取り組んできた。今は、本部実験校ではないが、生活教育の原理が脈々と息づいている学校である。川合章氏は、「生活教育とは何か」について和光学園報5月号で4点あげて説明している。

実際の生活それ自体が人間を育てる力を 持っているということを確認する。  
学校教育と現実の家庭や地域の生活との 関わりを追求していく。  
子どもたちを知識等の受け手としてでなく 発達の主としてとらえ、子どもたちの意欲的で能動的な学習や学習以外の活動 何を何よりも大事にしていく。  
子どもを人間としてとらえ、人間として 育つ道を探っていくことに徹する。

この4点は、和光鶴川小学校の学校づくりに基本的につながっている。

#### (4) 1年生と2年生

「いいたい、つたえたいことだらけの1年生だった」と小菅レポート(前述)にも書いてある通り、いろんなことに興味を持ち、へえ不思議だなあと関心を示したり、面白そうとさわってみたりする。その場その場で聞いたり、やったりすることに没頭してしまう。しかし、移り気で、新しい世界へ入り込んでいく。これは、幼児期から低学年の子どもたちの特徴である。

長いスパンでとらえれば2年生もこの中にくられるのであろう。しかし、1年生と2年生のものや人との関わり方や受けとめかたにはかなり違いがある。そこを明確にした生活勉強や教科・教科外教育のプログラムを設定することが大切ではないか。生活勉強のベーシックプランの作り方も学年の特徴を生かすべきではないか。……これが私たちの問題意識である。

今まで、和光の2年生の生活勉強では、「麦からパン」と「誕生」の取り組みが軸になって1年間が展開していた。

麦を育て、粉をひき、パンづくり、パン工場を見学し、さらにパンの材料に関わって「卵(養鶏場)」や「牛乳(牧場)」調べへと学習が発展していた。

誕生の学習では、グループで誕生の子の家庭訪問をし、親から生い立ちを聞き取って「誕生絵本」をつくってプレゼントする。

2年生はこうしたある程度長期にわたる大河ドラマ的实践や組織的調べ学習も可能になってくる。半年から1年のすべての期間を関連させてとらえる力はまだないが、それぞれの時期の一まとまりの学習を線でつないで受けとめることはできる。こうした学習を通して、子どもの驚き、発見、こだわりが生かされ、未分化な認識が徐々に分化していく。「パン」や「誕生」の単元がカリキュラムに定着してきたのは、こうした成果があったからである。

しかし、1年生の生活勉強に比べ、あまりにも絞り込みすぎてはいないか。1年生の、子どもの生活から始まる学習の豊かさが失われてはいないか。こんな模索が私たちにはあった。「パン」や「誕生」の良さを残し、しかも1年生の豊かさを大事にしながら、ものや人にもう少しつっこんだり関連させてとらえる学習の創造を課題とした。

まだ整理しきれていないが、新しい学習の萌芽が見えてきた。2年生の小菅学級が取り組んだ『『発表』から『じょうほう新聞』そして『一人1冊本』』などは、面白い。

一人の子が「ネズミを見た」と発表した。すると他の子も「ネズミのことならぼくもみた」「私も知ってる」と言った。これが、情報を集めようということのきっかけであった。それを、「ネズミ情報新聞」とした。新聞の切り抜きなどいろいろ集まったのでは合本してあげた。面白そうと思ったようで、子どもたちは「情報集め」に熱心になった。「月」「ススメバチ」「いちょう」「竹とんぼ」「ねこ」「たぬき」などどんどん広がっていった。それぞれ合本された。一つのテーマに何人かの子どもの情報が集まって、次第にわかっていくということ子どもたち自身が体験した。情報本は、個人の場合もあるが合作となる。

そこで、一人一冊本を提起した。その背景には、夏休み発表会の個人研究を夏だけのものにしないで、一人一人の日常研究にしたらどうかという発想がある。内容は、草花、パンづくり、電車、俳句集、詩集など様々である。これがまた、子どもの政策意欲を刺激している。

ぼくのいぬ はちとたたかう よわいのに  
ふるそうじ せんざいいれて あわだらけ  
さむいあさ くうきつめたい くるしいよ  
おのじじょうかれはいっぱい あるんだよ  
へきがかく ぺんきいっぱい つかいます  
ぺんきがね てにもくつにもついちゃった

一人の子どもの俳句集の一部である。子どもたちの生活の中の感情が見事に表現されている。こんな本が今続々完成してきている。

#### 4、少年少女期の教育を考える

##### (1)不思議の時代から冒険の時代へ

###### はひふへほ探検隊

私たちは低学年教育で、原体験を通した驚き、発見、こだわりを大切にした実践を重視している。「どうして、なぜ、不思議だね」という問いは子どもたちの特権のようにさえ思える。ところで、この間の3年生の姿を見ると、子どもたちの興味や関心はいっそう飛躍しダイナミックな学習の可能性を示している。子どもたちは活動的な学習を子のみ、頭脳をフルに回転させている。低学年期を「不思議に時代」とすると、中学年期は「冒険の時代」とでも名付けられるのではないだろうか。

子どもたちの学習の能動性は「探検隊」学習によって火がついた。実践の詳細は、本日の成田レポートで報告されている。成田学級では、子どもたちの知りたい、見たい、やってみいたいことで「探検隊」活動を組織した。活動内容は、教科教科外のすべてをふくんでいる。「ツバメ隊」「へびみたい」など次々に組織されていった。学級の探検隊の総称を「はひふへほ探検隊」と呼んでいる。

社会科学集で屋上からまわりを見ると鶴川小学校の隣の団地（電源開発の社員団地）に大きな鉄塔アンテナがある。子どもたちはそれが何であるか知りたくなった。調べにしてみると、それは電源開発の関係のものではなく、携帯電話のアンテナだということがわかった。電源開発会社は鶴小の北側の方向に見える。無数の電線が張り巡らされている。子どもたちはそこを調べたいと動き始めた。クラスでは、みんなで行くことにした。調べてみてわかったことだが、電気も日本列島を股に掛けて売り買いされているということである。

算数学習との関わりで、「三桁カンマ見つけ隊」ができた。和光では、4桁カンマで大きな数を読ませている。一人の子が、住宅販売のチラシを報告書にまとめて学級に発表した。しばらくそれが流行になった。

子の探検隊はきわめて柔軟な組織で、個人でも、関心のあるもののグループでも退院になれる。子の活動には、名詞、身分証明書、調査依頼書、報告書、探検隊員の心得など七つ道具があって子どもたちの活動がスムーズに展開されるように工夫されている。学級の子どもたちはすっかりこの方式に乗せられてしまった。

君たちはカイコ農家になれるか

「君たちはカイコ農家になれるか」のタイトルが齋藤学級の学級通信に載った。和光の

3年生は総合学習で蚕を飼育する。いつもの年のように分けてもらった卵の孵化率が悪かったので、業者を紹介してもらい有料で仕入れた。2クラスで5000粒のはずが、12000粒届いた。ここから3年生の壮絶な1ヶ月が始まった。

カイコの専門家に聞くと、1万頭のカイコを育てるには100坪の桑畑が必要だという。職員室で、どうするか話題になっていた。子どもに見せないで頭数も減らすこともできる。体育館工事を担当している地元の建設会社の人に相談した。鶴川地区の地主さんをくまなく知っているの、飼育に足りる桑の木の見通しをつくってくれた。

さらに、回転まぶしは飼いそろえると20万円近くするという。いろいろな手ずるで集めることにして、とにかく全頭飼育することにした。

初めのうちは良かった。そのうちに、オープンスペースが蚕棚で埋められるようになった。4令5令になると一日に食べる桑の量もすごい。子どもと教師は、朝の桑の葉とり、昼の桑の葉とり、夕方の桑の葉とりの毎日が続いた。桑の葉の上げ方の善し悪しが、蚕の成長にはっきりと現れるのである。

この間の学級通信には、カイコのことをほとんど見られない。「教育活動というよりは、本物の労働だった。「涙が出るほど辛い日もあった。」と教師の体験に基づいた言葉である。一日一日の出来事を書き綴る余裕もなかったようだ。

「子どもも感傷に浸ってはいられなかった。昔、脱皮の後の皮探しをやって、見つけたあなんて感動していたけど、今年はどうじゃあるもの。」

「子どもの作文がとっても良かった。」

教師は今までの実践との違いを痛感していた。子どもにとっても飼育労働だったのである。6月15日が孵化の日である。3年生は7月16日が夏期合宿に出発する日であった。蚕の成長を実ながら、合宿に出発できるかどうか不安の日々を過ごした。まぶしにいれるまで育たないと合宿に出発できない。しっかり桑の葉をあげて丈夫に育てることに徹した。出発1週間前にめでたくまぶしに入れることができた。

専門家の援助も得て、秋には立派な生糸になって等級も付けてもらった。子どもたちにも成果が見える形になった。3Aだそうで、カイコ農家にも大きなひけを取らない成績だった。商品にすると3万円くらいだそうである。カイコ農家が廃れる原因が分かる。

こうした活動に打ち込む姿、発揮される子どもの活力、鍛えられる子どもの知恵を見たとき、まさにこの時代は冒険の時代だというにふさわしいと感ずる。私たちの学校ではカイコであり、ヤギであり、牛であるが、子どもたちが挑戦する対象は多様であろう。探検隊活動のような学習は子どもの知的冒険にぴったりである。子どもたちの冒険心を揺り動かす生活を学校に組織することの重要性を痛感するのである。

## (2)やる時代から見通してやる時代へ

学校には、飼育小屋がある。子どもたちは2年生の頃から何を飼うか話し合っていたが、なかなか具体的な進展がなかった。3年生になって、何を飼いたいかわかるところから始まった。この活動に探検隊方式がダイナミックに展開された。

教師は、生き物を飼うのは君たちだ、なぜ飼いたいのか、どうしたら手に入れられるか、育てるにはどうやったらよいのかなど責任を持って帰ることがわからなければ軽々しく生き物を飼うわけには行かない。見通しのある生き物を学級で飼うことにしたい、と子どもたちに告げた。教師の言葉に子どもたちは発憤した。「アヒル隊」「ヤギ隊」「羊隊」「牛隊」などが、その動物を飼いたい子どもたちで結成された。土曜日や日曜日になると、様々な情報を元に「はひふへほ探検隊」が情報集めに飛び回った。

アヒル隊は本で調べて、やすく手にはいること、餌の上げ育て方、毎日卵をどれだけ生むかなどを報告した。

ヤギ隊は、子どもの国（横浜市）の牧場に行ってヤギを飼いたいんだけどどうしたら手に入れられるか、ヤギを飼うにはどんな餌が必要か、どんな小屋が必要か、どんな仕事があるかなどを聞いてきた。彼らはそこで、「ほんとに大事に育てるならただであげてもいいよ」ということを聞いて、有頂天になって帰ってきた。

羊隊は、おかあさんのアイディアで展望を開いてきた。ジンギスカン料理の店から肉の仕入先、そしてその先の業者をたどっていくことで飼い主にたどり着くことができた。

牛隊は、八王子の牧場まで探検に出かけた。そこでも本当に飼うならば、3万円でゆずってあげるという情報を手に入れてきた。

学級では、探検隊が集めてきた情報を元に、どの家畜が一番見通しがあるか幾度となく学級会を繰り返した。

校内の授業研究で検討した。

「アヒルはね、買い方が簡単。餌は　　で後は、水浴びの水槽があればいいんだよ。病気にもなりにくいんだって。それにね、毎日卵を2個、必ず生むんだって。儲けることが出来るからアヒルがいいと思います。

「ヤギはただだよ」

「牛は、大きくなったら誰が世話するんですか」

こんな論議が繰り返されていたが、この日はアヒル隊が優勢であった。紆余曲折を経ながら、最終的にはヤギになった。こうした経過があるだけに、子どもたちは飼育活動の主体になって当番活動をこなしている。10月にとどいたヤギが11月に子ヤギを2頭産ん

だ。子どもたちは、当番の日ほうきうきして登校しているということである。

牛隊の活動報告は、実にきめ細かかった。自分たちが飼育することを見通して各種調査をしてきている。

行ったところ...ユギファーマーズ

目的...乳牛をもらう

見たこと聞いたこと...見たこと... (省略)

聞いたこと...平均寿命、病気、角、餌、餌の量、牛乳の量、

子牛1頭...3万円

交通費...

お世話になった方の住所

牛隊のような、見通しを持った調査をしたグループは少ない。しかし、この牛隊の姿の中に少年少女期に育てたい子ども像が見えてくる。小学校定額年まで「やる」こと事態が喜びであった子どもたちも、目的と見通しを持って行動できるようになる。そういう意味で「見通してやる時代」と名付けてみた。活動的な学習の中で「見通す力」を育てたい。

また、見通すことが出来るということは、仕事(文化活動)を通しての責任と分担、計画的な実践の意義が理解できる時代になったということである。生活の主体者としての教育を本格的に実践したい。

### (3)知識の時代

和光(鶴川)小学校では3年生から専科による理科の授業が始まる。理科の教科通信は『科学のめ』と命名されている。このタイトルに、教師の子どもへの期待が読みとれるように思える。科学の概念の暗記というよりは、対象に科学的に迫る「目」であり「芽」ではないかと思える。

3年生は黒川地域の農家の方に頼んでキャベツ畑に青虫とりに出かけた。青虫からモンシロチョウまでの学習は、子どもたちに人気がある。キャベツ畑についた子どもたちの中には、「先生どうやってとればいいのか」と戸惑ったり、目の前にたくさんいても「全然いないよ」と言ったりする。また、せっかくなかでも、加減がわからなくてつぶしてしまう子がいたりしたという。理科教師は本物の自然の中での青虫との出会い自体が価値ある学習だったと言っている。和光では、低学年で原体験を重視した教育を進めているが、中学年以上の教科教育でも大事にされなければならない原則であろう。

子どもたちは、自分で育てながら観察記録をとる。「幼虫はキャベツ以外でも食べる。大根は食べるがレタスは食べない。」「薄い炉のキャベツをあげたら運この色が薄い色になっ

た。「青虫の足には吸盤のようなものがある、それでつるつるしたところも移動できる。

青虫の学習と結びついて、子どもたちの生き物への興味や関心は広がる。子どもたちはいろいろなものを学校に持ち込んだ。「オタマジャクシ」「蝦夷山椒魚」「キアゲハ」「メダカ」「が」...子どもは山椒魚の孵化にこだわって休み時間にも来て観察カードを書く。こうした学習を通して生き物観を育てることが「科学のめ」を育てることになるのであろう。

3年生になると、「なぜ、どうして」と因果関係を解明する授業に興味を示す子どもが確実に増える。

「100CCの水にほう酸を一袋溶かしました。もっと溶かすにはどうしたらよいでしょう。」

子どもはそれまでの経験を元に仮説をたてて予想をつくる。10数個の予想が出たという。

また、電気の回路の学習などでも、「なぜ電気はつくのか、なぜつかないのか」と子ども同士の激論が起こる。

こう見てくると、中学年は「知的な冒険」「知的な楽しみや遊び」が発達上欠くことが出来ない時代といえるのではないだろうか。そういう意味で「知識の時代」と名付けた。

フランスの教育学者ドベスは『教育の段階』の中で、少年期を「観念的段階」と言っている。「時、空間、数、因果、運動などの母観念のまわりに、感覚的、経験的な事実をつなぎ合わせ組織しようとする。」この5つを母観念と名付け、少年期には母観念を育てる教育が必要だと言っている。時間観念（歴史的観念）、空間観念（地理的観念）、数観念、因果（理科）の観念、運動（体育）の観念が、人が人間として成長する上での母観念ということになる。

子どもたちを学主主体としてとらえ、子どもの生活から出発する学習を大事にしながらも、教師としては子どもたちの発達に必要な課題をきちんと教育していくことを放棄してはならないということである。

#### (4)友だちづきあいの時代

自分の思うこと、やることが統べて「善」という幼児期から低学年を「王様の時代」と名付ければ、中学年期は「仲間の時代」とでも言えるであろう。認識においても、行動においても自己中心性が剥ぎ落とされていく。しかし、それは自然発生的に転換されるのではない。意図的な指導があるかどうか、その後の育ちに大きな影響を及ぼすと考えられる。この時期、遊びや種々の集団的活動を通して友だちの理解や、社会性を育てたい。

私は、教師になって4年目に3年生を担当した時の0君を思い出す。彼との2年間は、

『続非行』(民衆社)に詳しい。入学したときからの暴れん坊で、学校内でも近所でも0君を知らない人はいないくらいであった。学校では教室から抜け出して他のクラスへ。廊下で会う先生たちに注意されると「このくそじい、くそばばあ」と罵る。自分の気に入くない子には執拗に暴力を振るう。一度かっとなったら納めることができない。

私が3年生で担任したとき、周りの子どもたちは0君に関わりを持ちたくないと言うのが本音だった。親も、真剣に考えていて、そのころ「親の子殺し」のことが新聞を賑わしていたのだが、「私その気持ちわかります。」とまで語るほどだった。そんな0君に変化が見えだしたのは、一方で0君の暴力を批判しつつも、「0はね、本当は寂しいんだと思うよ」という子どもの声があって、遊びの仲間に加える取り組みがクラスで展開されてからであった。4年生の班長選挙の時、みんなからの支持が得られなくて、教室の天井を見ながらこぼれる涙を友だちに見せまいとする姿を見たとき、私は、彼の人間的な成長を確信できたのであった。

その後10後、20年後と3年生4年生時代のクラス会を企画する幹事はいつも0君である。彼に聞けば、同級生の動静が今でも良くわかる。

こうした仲間との関わりで生まれる人間変革のドラマは、少年少女期に始まると言っていいのではないだろうか。

今の3年生に、H君がいる。彼の暴力をめぐって、3年生のクラスで「絶対許せない。」「幼稚園の時からそうだったし、2年生まで何回も謝ったことがある。それでも、くりかえしている、信用できない。」と夕方遅くまではなしあいが続いたという。こうした仲間からの厳しい抗議に、H君の受け止めはかなり深まったという。

また、子どもたちの卒業文集などを読むと、女の子の間に、親密になりすぎる関係ができたり、排除の関係が生まれたりして友だち関係での悩みが始まるのはこの時代である。ところで、この時代の子どものはその後の時代に比べ、率直に主張しても屈折した関係にならないで済むことが多い。

教師と子どもの関係よりも子どもと子どもの関係が密になる時代だからこそ、意図的な「友だち理解の教育」の必要性を強調したい。

そして、子どもたちの要求に根ざした共同の活動や学習を営むことを通して、「自治」の教育をすすめることもこの時代の重要な課題として強調したい。

#### (5)少年少女期の教育

3年生までの学校で、「少年少女期の教育」を語るには少々時期が早すぎるような気がする。子どもたちの発達全体を見ると3年生という時期は、どちらかといえば低学年教育の

延長線上でとらえた方が一括りにできるように思える。しかし、子どもたちは明らかに新しい発達の姿を見せている。発達における「9歳10歳の節目」ということがよくいわれているが、それを感じさせる兆候を至る所に見せる。私たちは、その兆候を具体的にとらえながら、少年少女期の教育の課題を鮮明にしたいと思って、(1)から(4)を書いた。

子どもたちともう1年取り組むと、もっと見えてくるものがあるように思う。いっそうこの課題を深めていきたい。私たち自身の研究のためにも、今回参考とした研究者の提言を紹介しておく。

田中孝彦氏（東京経済大学）は、『子どもらしさのこれまでこれから』（新日本出版）の中で、発達理論の中の少年期を考察し、ドベスの『教育の段階』（堀尾輝久、斎藤佐和訳・岩波書店）を引用しながら、「少年期と教育」を論じている。

「（ドベス）は少年期の特徴を、とくに次の二点に求めている。

第一に、ドベスは、ワロンがこの時期を「範疇的段階」と呼んだが、この時期の子どもは、まだ、青年や大人のように概念やカテゴリーを使って抽象的な思考をできるようにはなっていないとして、「観念的段階」と特徴づけている。彼によれば、この時期の子どもは、時、空間、数、因果、運動などの基本的な観念（ドベスはそれを母観念と呼んでいる）を獲得し、その観念の周りに、いろいろな感覚的、経験的な事実をつなぎ合わせ、組織しようとする。この時期は、いろいろな知識や事実への欲求が旺盛になる「知識」の時代であり、暗記力も急速に延びる時代である。

第2に、ドベスは、この時期を友だちづきあいの時代と呼んでいる。この時期、子どもは、幼児期のように個人対個人の関係でもなく、グループとして行動し、集団の活動に参加することに熱中し、集団としての感情を持つ。この時期に、学校における学級活動や、グループでの学習活動、放課後の地域での活動などが活発化していく。」

「この少年期の時代は、それ以前の乳幼児期が、家庭の中で親密な関係を結びながら成長していくという意味で「家庭化」の時代であったとすれば、学校での友達づきあいと学習による知識の獲得が、重要な活動となり、学校が非常に重要な意味を持つようになってくる時代である。学校なしに少年期は考えられないという意味で、少年期は「学校化」の時代であり、子どもの成長は、学校によって支えられる。」

これだけ、学校が重要な意味を持つとすれば、「少年期にふさわしい学校」はどうあるべきか。田中氏はドベスの次のような文章を引用している。

「よい小学校教育というのは、子ども自身の個人的活動や探求を通して知識の獲得に参加させるような教育であり、子どもに、聞き手として動きの少ない多かれ少なかれ受身的な態度を押しつけるかわりに、彼自身の自発性と表現方法を育ててくれる教育である。...

……集団的な授業形態をできるだけ少なくして、反対に調査や分類作業や環境の学習などの形を取った、子どもの個人的な探求を必要とする学習を多くすること、物をつくったり管理したりする活動に大きな位置が与えられるように教室を制作室や仕事部屋に変えること、ただし、無秩序に無駄に騒ぐことや、思考作業を軽視する活動主義はさけること、そして、これらの方法に既に十分考慮されている活動の中にも、想像力の飛躍に好都合なりラックした時間を必ず設けるようにすること等々、これらはすべて小学生の必要に適合することに心を配る教育において、望ましいと考えられている特徴の一部である。」

この上に立って、ドベスが少年期教育の課題を三つ示していることを紹介している。

第一は、母観念を獲得させること。「つめこまれた頭」でなく「良くできた頭」を育てること。

第二は、美的意識に目覚めさせること。

第三は、社会性を発達させること。

田中孝彦氏の指摘は、私たちの実践を分析したり、課題を明確にする上で大変示唆に富んでいる。

また、新日本出版社の少年期シリーズの中の清水民子氏の「少女期の教育」への提言も示唆に富んでいる。

清水民子氏(日本福祉大学)は、『女の子はどう育つか—少女期その世界と発達』の中で次のように言っている。

「児童期の子どもの発達は、多様な層の構造においてとらえる必要がある。ピアジェが具体的操作といい、ドベスはデューイの

” Learning by doing ”(行動することによって学ぶ)という言葉がふさわしい時期と言っているように、現実の環境の中で具体的な課題に処して活動し、多様な経験を重ねることの重要性は言うまでもない。豊かな自然環境にふれ、生活に必要な仕事を学び、仲間と遊びたわむれることは、この時期にこそ成長の糧としてもっとも必要とされる。

いま、それらの活動が子どもたちの世界から欠けていることも憂慮される。

しかし、この時期の発達について重視されなければならないのは、そのことだけではない。知識や学習意欲や芸術への志向性や道徳意識や価値観が、具体的な活動や体験とどう絡み合って発達していくのか、様々な生活領域に子どもはどのように、自分の時間を配分し、子ども自身の好みの生活様式を作り上げていくのか、また、まわりの大人たちがそれを許したりするにはどういう事情によるのか、というようなことがもっと明らかにされる

べきではないだろうか。」

こうしてみると、人間的な成長を計る上で、少年少女期にくぐらせたい固有の課題が見えてくる。「知識」の時代であり、「友だちづきあい」の時代にふさわしい学校生活を創造したいものである。

## 5、下からつくる教育課程を

### (1)教育課程をどうつくるか

教育内容の超過密と詰め込み教育への批判と見直し要求が大きな世論となっている。その中で学校とは何か、教育とは何かが根本から問われている。

硬直した教育を否定し、教育内容そのものを子どもに任せ教師の指導をも否定するような論調もある。それが、子どもの側に立つ教育だと言う。

和光鶴川小学校の教育課程をつくるにあたって、私たちが進めてきた「下からつくる教育課程」の考え方は、子どもを発達主体ととらえ、子どもの発達の必要（教育課題）に立って教育の内容と方法をつくるということである。

したがって、知識の量で学力を判断したり、偏差値で人間を計るような硬直した教育を明確に否定している。何の役にも立たないような古びた「知識」の暗記量で「学力」を計るような現代の教育内容といわれているものの多くは削減されるべきだと考えている。

また、教師の側に「知」があって、子どもは教授をうけるべきだと言う考えとは大きくかけ離れている。子どもは学びの客体ではなくて、学びの主体として育てられなければならない。

しかし、教育内容を子どもに任せたり、教師の指導を放棄することが子どもを大事にした教育だと言う立場には立っていない。

昨年、私たちはそうした立場から「幼児期から低学年の教育課題と実践」をまとめた。

今年はその発展として、少年少女期の教育を展望しながら学校づくりを進めてきた。今年はまだ大変不十分ではあるが、第4章でその骨格を示した。

「不思議の時代から冒険の時代」子どもたちはダイナミックな学習を好む。子どもたちの興味と関心を大切に、冒険心を引き出す知的体験や生活を組織する。

「やる時代から見通しを持ってやる時代」(策略の時代)具体的な活動や体験を通して目的意識や見通しの力を育てる。また、責任と分担など、生活の主体者としての力を育てるのもこの時代の課題である。

「知識の時代」(部分の時代から連関の時代)擬態的な活動や体験を通して、知識や学習意欲や芸術への指向性や道德意識や価値観を育てる。ドベスの母観念の提起を積極的に受けとめて課題と内容、方法を考える。

「友達づくりの時代」(人間関係の転換の時代)教師と子ども、大人と子どもの関係よりも、子どもと子どもの関係が密になる時代だからこそ、子どもの内面に寄り添った意図的な「友だち理解の教育」を進める。そして、集団生活を営む上での「自治の教育」もこの時代の重要な課題である。

## (2) 真の学習主体を育てる大胆な授業改造を

### 今までの到達点

今、子どもたちの矛盾はいろんな意味で授業に収斂できるといっても過言でない。学力問題、偏差値問題、競争と差別、人間観のゆがみ……教師が授業を変えることによって子どもたちに輝きを生み出すことができる。授業改造の課題は緊急であり重要である。

私は本年度の和光小学校の公開研基調報告で授業改造の課題を5点にまとめて報告した。

子どもの生活から出発する学習

子どもと学ぶ

わかることの追求

学び合いと育ち合い

地球時代を生きる仲間としての学習

以上は、現代の授業改革の基本だと考えている。

和光鶴川小学校の基調報告では、算数に引きつけて授業改造の課題を提起したい。

和光小学校では、すでに今までの授業づくりの成果として「やる気を育てる手作り算数」(明治図書・1990年刊)この書は好評で既に4版を重ねている。88年度、89年度と私たちが算数の研究を全校の重点研究にしたのは、あらゆる教科での「学ぶ意欲を育てる授業づくり研究」の典型づくりにあった。

当時の問題意識は次のところにあった。

「子どもたちの状況は学習以前の状況として受けとめられやすい。しかし、生活を立て直さなければ学習に立ち向かわせることができないかということ、そうではない。彼らの知的好奇心に火を付け、わかる喜びを広げる中で学習に立ち向かう子は必ず増えるのである。学習でちゃんとさせることが生活を自立的にしていくという回路もあるのである。できない子わからない子ほど、できたいわかりたいという思いが強い。どの子も、新しい知的な世界に目を開くことはこの上なくうれしいことなのである。ここにこそ子どもの本音があ

る。」

そして、やる気を育てる授業づくりのポイントを5つにまとめて提起した。

- 第1...どうしても解きあかしたい典型場面の 設定
- 第2...算数好きにする自主プリント(キャラクタプリント)の作成
- 第3...学ぶ楽しさを創り出すやってみる算数
- 第4...認識を深めあう討論の授業
- 第5...子どもを励ます学級通信、教科通信、算数計算カルテ

#### 今年の課題

今年、私たちは何を考えたか。それは、算数分科会の基調に詳しい。そこに、次の観点を加えて読んでもらうことによりいっそう理解を深めていただきたい。

まず第一は、私たちのまとめた5つのポイントを発展させる立場に立たないと、今日の授業改造の課題が見えないと言う立場に立った。この立場は、日頃の授業実践で、子どもたちがどのような授業を望んでいるのかを子どもの事実でつかもうということであった。子どもの様子や言葉に敏感になろうということであった。これが見えてきただけでも今年の研究は大成功ととらえよう、ということであった。

第二は、発見がありこだわりが大切にされる学習をつくろうということであった。算数はどちらかというと、教師の側に問題があって、子どもの側は解かされるだけの教科になりやすい。教師がどんなに優れた教材を用意しても授業が教え込みの立場で行われたら子どもの意欲を引き出すことはできない。「子どもとつくる算数」の授業を創造しよう。

「系統的な指導は子どもにわかる」ということを吟味してみよう。学ぶ主体の側の子どもの目的意識がなければ、そのテーマは意味を持たない。子どもに「問い」を育てる授業とはいかなるものか。

第三は、生活と分化・科学に開く「本物」を扱う学習をつくろうということであった。算数という教科は、現実世界の問題を数の世界に置き換えて解釈し解決をはかる教科である。算数の奥深さを子どもなりにとらえることのできる授業にしたい。

わかると言うことは単なる知識の積み上げではない。今までの見方考え方が否定され(改められ)新しい知の世界が開くということである。子どもに新しい世界を開く授業を創造しよう。

第四は、一人一人のわかり方の共有と学習の共同である。人間の学びには一面性がつきものである。この一人一人の一面性がまず、尊重されなければならない。一人一人のとらえ方を出し合ってこそ物事のあらゆる側面が見えてくる。そのうえに立って、討論を重ね物事の本質に迫ることができる。

間違いを恐れてはならない、また、否定してはならない、そして、同情することも正し

くない。間違いこそ真の学びに欠かせないものだと言うとらえ方に立つことが必要である。

第五は、こうした授業をつくるためには、現行の和光のカリキュラムでもまだまだ過密である。子どもたちに学ばなければならない基礎基本とは何か。それを明確にしたカリキュラム改革が必要である。

第六は、学ぶことと知の定着をともに大事にすることである。単なる鍛錬主義でない習熟学習を創造したい。

算数分科会の斎藤実践は、「子どもの声に学ぶ」、「子どものこだわりにつき合う」、「子どもの学び合いを優先する」、「子どもとともに学ぶ」を強く意識して取り組んだ報告である。何よりも、自分の押しつけを自己修正しながら教師自身も算数の世界を学んでいるところが共感を呼ぶ。3年生が真に知的に育っていく姿が報告されている。

「12個のクリームパンを一人に4個ずつ配ると何人に配ることができますか。」という「包含除の意味」をとらえる学習で、子どもたちは大討論を展開した。

問題を読むとすぐに、

「これはわりざんじゃないんじゃないの。」

「さっそく、疑問から始まった。」

という子どものつぶやきもれた。つぶやきが許されているところが良い。

子どもたちはクリームパンを配る絵を描いて考えた。答えが同じ3人になっても、予め3つの枠をつくっておいてトランプ配りで4個配った子もいた。それは、答えの3人に形をそろえただけで包含除をやっている訳ではない。配り方の討論があった。答えを確かめながら、4個まとめて配ることが討論の中ではっきりしてきた。

次は式の書き方で討論した。

12こ÷4こ/人を書き表すのだが、初め、16通りもの考えが出された。一つ一つ納得を深める討論で量の関係がわかる式が承認されるようになっていった。その日の授業は、子どもたちだけでどんどん授業が進んでいったという。教師は子どもの発言をメモするだけだったという。

斎藤氏はレポートを次のように結んでいる。

「教師の戸惑いに子どもまでつき合わされ、右往左往しながらの実践だったが、わり算という新しい学習に向かう子どもたちの様子から、欲求や関心を大切にすることとわり算という一つの分化を習得すると言うことは、同じ流れの中で成り立つことがわかった。子どもたちの中には道の分化の習得することへの探求心が溢れていた。その問いは乗り越えるべき課題が明らかにされることで生まれ、達成されていく。課題は教師が提示したり、集団の中で見つけられたりすることだが、いずれにしても、同じ歩みの中でのみ明らかに

されることだった。

欲求や関心を放っておいても、知識を教え込んでも子どもの中に問いを育て真理に迫る学習は組織できないであろう。」

教育課程をつくるということは、教育の枠組みをつくることだけではない。具体的な授業が変わらない限り、魂の入らない枠づくりにしかない。真に学習主体を育てる授業づくりに挑戦したい。

## 6、おわりに

「少年少女期の教育」もそれにともなう「教育課程づくり」も、まだ私たちの研究は途上であって歯切れの悪いものになっている。ご容赦願いたい。

和光小学校・和光鶴川小学校では、今年の4月より両校から教育課程検討委員を選出して、すでに10回以上の会合と職員会議での検討を済ませ21世紀をめざす教育課程の骨格をまとめつつある。近い将来、みなさまにご報告して検討していただきたいと考えている。そのときには、今回歯切れの悪かったところはもう少しはっきりした報告をしたいと考えている。

分科会は3つしか用意できませんが精一杯の準備でした。宜しくご協力お願いします。